

氏名	三井 麻央		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	文学		
学位授与番号	博甲第 6673 号		
学位授与の日付	2022 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)		
学位論文題目	19 世紀のベルリンにおける博物館建築とその装飾		
学位論文審査委員	准教授 岡本 源太	准教授 龍野 有子	
	准教授 本田 晃子	准教授 大久保 範子	

学位論文内容の要旨

本論文は、ドイツのベルリンに位置する、現在では「博物館島」と呼ばれる区域で、19 世紀のあいだに段階的に建設された旧博物館（1830 年開館）・新博物館（1855 年開館）・旧ナショナルギャラリー（1876 年開館）の 3 館について、各館の建築装飾がいかなる機能を持っていたかを論究したものである。

壁画やレリーフ等の博物館装飾は、当時の社会的・文化的・学問的状况を反映させながら、館の理念や展示物に関する情報を人々に伝達しようとした、19 世紀に特有の建築的媒体である。東西ドイツ再統一後の 20 世紀末から本格的に進められるようになった博物館島研究は、これらの装飾で表現された内容を次第に明らかにしてきたものの、近代ドイツが成立していく 19 世紀当時においてその建築装飾そのものが果たした役割について十分に議論を尽くしているとは言い難い。本論文は、これら博物館の建築装飾の詳細な検討を通して、そこに設立趣意書のような公的言説には表面化していなかった重層的な国家観・歴史観が存在していることを解明した。

本論文は全 3 部、計 7 章からなり、各部の前半（第 1, 3, 6 章）で各館の建築家や館長が公に示した理念や構想について、残されたテキストをもとにその内容を整理する。そして各部の後半（第 2, 4, 5, 7 章）では、前半部で整理した理念や構想を伝達するために用いられた建築装飾の、細部の考察に主眼が置かれる。

まず第 1 部第 1 章では、旧博物館での絵画展示に際して行われた議論の記録に関する分析を通して、旧博物館の主要な構成員の間にみられた、「美術史」の捉え方・伝達方法の差異について整理する。旧博物館の建築家フリードリヒ・シンケルを始めとする中心的人物らは古典古代やルネサンスの芸術を重視した上でそれらを効果的に伝達し、人々を陶冶する展示空間の形成

を試みていた。一方で第2章では、それらの展示空間を包み込む建築と、外壁にかつて設えられていた装飾壁画が対象となる。この壁画は、古典古代の教養や美的な価値観、美術館の目的を示すために館外に向けて設置された。しかし単に古代を主題とするのみならず、さまざまな同時代的な手法を用いてシンケルの造営した近代都市ベルリンとの対比が強調されていることが、残された素描や構想図から示される。

次いで第2部では新博物館について、まず第3章で建築家のアウグスト・シュテューラー『新博物館』で著された博物館構想の要点を明確化する。旧博物館で重視された古典古代の教養の伝達に加え新博物館では、世界のあらゆる文明についてひとつの歴史としての「見通し」を得る、歴史化の機能が重視されている。つまりシュテューラーの構想は博物館施設によって各地の文明を単線的な歴史へと集約することを目的としているが、各展示室で各地の歴史や物語、風景を描いた装飾壁画の細部を見てみると、単線的な歴史への集約というのが不可能であることがわかる。例えば第4章では、古代エジプト、ギリシャ、ローマの展示室の壁画について、各室の壁画に見られる風景画は、当時の都市や古代文明に対するヨーロッパからの19世紀的な視点からそれぞれに大きく影響を受け、別種のイメージソースによって成立していることを示した。さらに第5章では、新博物館それ自体が古典古代に重点を置くのに対し、館の中央に位置する階段室を飾るカウルバッハの大規模な壁画は、近代ドイツ、プロテスタントの文化に重点を置く構成となっており、根本的な歴史観の違いが明らかであることがわかる。

ドイツ統一を跨いで計画され開館した旧ナショナルギャラリーは、世界各地の多種多様な文化を単線的な歴史として伝達することを目指した新博物館に対して、むしろ近代ドイツのための美術館であることが強調される。よって第3部第6章ではまず館外の装飾や建築様式の選択に着目し、統一したばかりの「ドイツ」がいかにか自らの国家の美術としてのドイツ美術史を統合し、表象したのかを整理する。プロイセン主導による統一ドイツという画一的な表現によって統合されたかに見える旧ナショナルギャラリーの「ドイツ美術史」であるが、第7章で考察するオットー・ガイヤーのフリーズは、プロイセンの美術がバイエルンからの大きな影響のもとにあったことを示している。それにより旧ナショナルギャラリーが率先して示した「ドイツ」観にも揺らぎが見えること、つまりプロイセン主導のドイツ統合の困難さが明らかにされる。その一方で、バイエルンの美術、建築もまたプロイセンからの双方向的な影響のもとで形成された可能性を最後に提示し、論文を締めくくる。

学位論文審査結果の要旨

三井麻央氏の博士学位論文は、プロイセンからドイツへと変わりゆく一九世紀に、国家主導でベルリンに建設された三つの博物館——旧博物館、新博物館、旧ナショナルギャラリー——について、それらの建築装飾の示す世界観・文化観・歴史観・政治観を仔細に読み解いたものである。三部構成、全七章からなるが、そこには既刊の論文四本が組み込まれており、うち二本は全国学会誌の『美学』（美学会）と『表象』（表象文化論学会）に専門家の査読を経て掲載

されたものである。加えて美術史学会全国大会で口頭発表されたものも組み入れられている。審査会は、2022年2月8日13時より芸術学実験室にておこなわれた。主査は美学の岡本源太、副査は西洋美術史の龍野有子、近現代建築史の本田晃子、日本美術史の大久保範子が務めた。

プロイセンがドイツ統一をおこない近代国家を形成していく途上で相次いで建設された旧博物館、新博物館、旧ナショナルギャラリーの三館は、その設立経緯からして19世紀ナショナリズムの典型例とすることができ、先行研究においてもその点は十分に強調されてきた。それに対して三井氏の研究は、博物館建築の装飾という非言語的なメディアに着目することで、言語的に表現されてきた国家主導の博物館の理念の背後に、多種多様な観点や思想の交錯があることを剔抉している。ここに本論文の第一の意義があるだろう。

旧博物館は、当初は芸術・産業の専門家養成という目的で発案されながら、しだいに一般公衆の陶冶・啓蒙という目的が打ち出され、しかしその陶冶・啓蒙の目指すところも芸術の歴史を教示するのか普遍的な美を提示するのかが揺れ続けたという。三井氏は博物館内の展示プランの紆余曲折を丁寧にあとづけている。そして旧博物館の壁画が、永遠不変の美の殿堂を近代都市化するベルリンのなかに位置づけなおす機能を担っていたことを指摘している。博物館という「過去」と、近代都市という「現在・未来」と、これらの時間を建築装飾が結びつけようとしていたという指摘は、一九世紀の都市像・歴史観を考えるうえで興味深いものである。また新博物館について、巨大な人類文明史のパノラマが神話的・寓意的に描き出されていたその装飾壁画を丁寧に分析することで、人類文明という普遍的な視点と、近代ドイツという国家主義的な視点とのあいだにゆらぎが生じていることを指摘している。かつそのような壁画の様式自体がポンペイ発掘に刺激されたもので、ヘーゲル主義から歴史実証主義への過渡期にあった当時の歴史観のゆらぎを示しているとの示唆も、本論文独自の貢献であろう。旧ナショナルギャラリーの装飾フリーズの検討を通して、ドイツ統一を政治的に主導したプロイセンが、しかし芸術的・文化的には後進国であったがゆえにしばしばバイエルンに対して譲歩していたことを解明したのも、本論文の重要な学術的寄与である。

本論文の第二の意義は、このような装飾が生み出される際の複数のジャンルの交差を浮き彫りにした点である。先行研究ではしばしば博物館の理念に注目が集まり、また美術や建築の傑作が重点的に検討されてきたが、三井氏によれば建築装飾には当時のパノラマやジオラマといった見世物、陶器などの工芸品への絵付け、考古学・歴史学による復元図といった、雑多な領域の技術や観点が取り込まれていたという。美術史や建築史の研究ではしばしば周縁に追いやられがちな領域の技術や観点の重要性を明らかにしたことは、芸術を社会全体のなかに位置づけて理解するにあたって、大きな方法論上の寄与をなすものであろう。

審査会では、こうした近代的博物館の起源となったルーヴル美術館の影響はどうであったのか、博物館装飾にあらわれている理念のゆらぎをそれでも覆い隠すメカニズムが作動しているのではないかと、博物館装飾がその理念を提示しようとした「公衆」「国民」は実際にいかに形成された（されなかった）のか、こうした博物館装飾が二〇世紀に入ると消滅していわゆる「ホワイトキューブ」へと変化していくのはなぜか、といった疑義が差し出された。これらは本論文

の欠落を突くものではあるが、三井氏からは今後の研究の見通しというかたちで十分な応答があった。

以上、丁寧な分析検討により重要な新知見を提示し、今後の研究の発展にもつながる論文と認められ、審査員は全員一致で博士の学位に相応しいものと判断した。